

知的障害の人(特に自閉、行動障害のある人)の主体性を尊重する支援

地域生活支援センター風の輪

所長 加藤啓一郎

1. 知的障害の人を理解することの難しさ
 - 1) コミュニケーションがとりにくい
 - 2) 理解が難しい
 - 3) 生活習慣が自立していない、作業ができない
 - 4) 問題行動が多い(自傷、暴力、物を壊す、こだわり等)
 - 5) 何をするか分からない、と思われてしまう
特に問題行動は受け止めにくい 迷惑な行動が多い

2. 知的障害の人が我々に感じている難しさ
 - 1) 分かってくれない、理解してくれない
 - 2) 怖い、気分次第
 - 3) 言うことを聞かないと何をされるかわからない。決定権を握られている
 - 4) 変な目で見ると
 - 5) 信頼できない、支えてくれない

3. 我々と知的障害の人たちとの関係と本人への影響
 - 1) 我々が上で知的障害の人を劣っている存在として捉える
 - 2) 怖い、わけが分からない 関係を持ちたくない、避けたいと思う
 - 3) 傷害のある人 - 人に認められることが少なくなる 自分に自信が持てない(自己イメージが悪くなる) 自分は駄目だと思う

4. 障害者本人が自信を持って生きていけるためには、こういった関係を変えていけることが必要(関係支援の視点)
 - 1) 本人を一個の主体として認め、尊重すること
 - 2) 本人を認め、信頼することで、本人が安心できる関係を作っていく

5. そのために支援者としてやるべきこと
 - 1) 本人を主体として受け入れる(頭で理解することも必要だが、同時に態度のレベルで本人を認められること、本人に共感し、好きになれること)
 - 2) 問題行動も含め、行動の意味を了解すること
 - 3) 本人が信頼できる関係を作っていくこと
安心できる 気持ちを訴えられる 相手を大切に思える、相手に合わせられる 相手の気持ちも考えながら、自己表現できる、自分の問題について相談できること
 - 4) その関係をベースにして、支援者が家族や友人、福祉関係者、地域の人等との間の媒介役となり、本人が安心して暮らしていける関係を地域に作り、広げていけるよう支援する

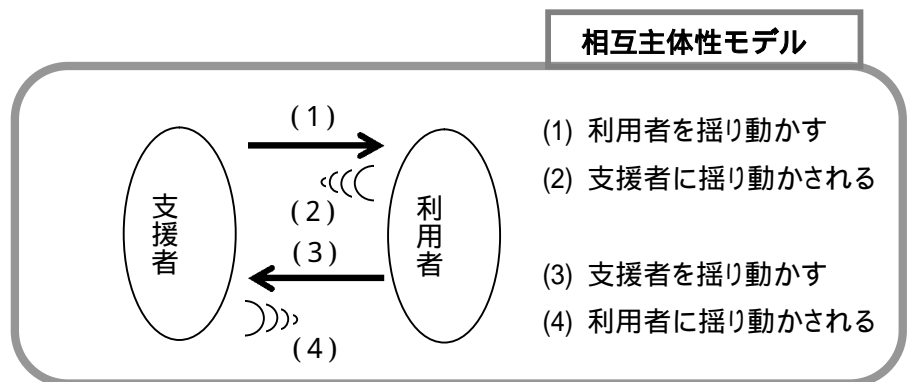
6. 支援者側に主体性が必要

- 1) 本人を主体として尊重するためには、支援者側にも主体性が必要
- 2) 支援者にも葛藤や戸惑いがあり(本人を主体として受け止めようと思うが、理解が難しく、受け入れにくい)、それを乗り越えて、本人から何かをつかんでいくことを通して、利用者を主体として受けとめられるようになる
- 3) その際、行動の意味を理解することは、本人にとっても、支援者にとっても、それぞれ重要な意味を持つ
- 4) 主体性 指導訓練の時代の一方的な積極性ではないこと
- 5) 反対に、「お客様は神様です」といった表面的に利用者中心の支援でもないこと(買い物を次々にする はい分かりました)
- 6) 本人のしんどさ、訴えを理解できること
- 7) 支援者 - 本人の間の相互主体的な関係をベースに、本人が自分を肯定し、自信をつけ、それがエンパワーメントに繋がるように支援する

7. 相互主体的な関係について(岡村理論、鯨岡理論を応用したコミュニケーションモデル)

- 1) 力関係ではなく信頼関係がベース
- 2) 押し付けではなく、障害者が納得できるかわり

(1)と(3)の相手を揺り動かす」側面が中心だと、どちらが強いかの力関係になってしまう
こちらが相手を揺



り動かすとき、揺り動かされている相手の気持ちを意識する。こちらが相手を見ていると同時に相手もこちらを見ている。相手のまなざしを意識する。

揺り動かされている相手を意識 相互主体性モデルの(2)の部分意識する

⇒ 同様な働きかけをしても、利用者が援助者をどう見ているのかによって、全く異なる結果となる。

例) お茶碗片付けようか

- a) 利用者が援助者を「怖い」と思っているとき 「叱られるといやだから、片付けよう」
- b) 利用者が援助者を好きだと思っているとき 「一緒にできて嬉しい」
- c) やってくれて当然と思っているとき 「なんでやらせるねん」

相手がこちらを揺り動かすとき、揺り動かされている自分を意識する

揺り動かされている自分を意識 相互主体性モデルの(4)の部分意識する

支援者が自ら揺り動かされている自分を意識できないと、動揺して、自己を防衛するため、より強い攻撃によって反応してしまうこともよくある。「こわい」という自然な気持ちを相手に伝えるだけで相手の攻撃性が収まることもある。

⇒ 悪循環する関係。

例) 利用者 腕時計の位置を気にする

支援者 「やめて」と手をふり払う

「今日は余りかかわって
くれなかったやないか」

利用者 必死になって手をとろうとする

支援者 「やめなさい」と必死になり、手をひねる

「何で俺を拒否するね
ん」

利用者 支援者に噛みつく

支援者 利用者を叩いて引き離す

「バカヤロウ」

これらの点に気をつけてかかわることにより、相互主体的な関係形成が可能となる 利用者
と支援者が課題を共有できるようになる

8. 我々の仕事は介護や訓練か、それとも利用者との関係形成か、関係調整か？

1) 相手を物として捉える見方(支援関係の客体的側面)

- ・ ケアの対象;入浴、食事、排泄介助等の対象
- ・ それぞれの行為が完了すれば、業務が達成されたものとみなされる
- ・ 利用者の気持ちよりも、安全面、衛生面、効率等が重視される

2) 相手を一個の主体としてとらえる(支援関係の主体的側面)

- ・ コミュニケーションと理解
- ・ 関係を作る

その人が介護してくれると安心できる。自分のことをよく分かってくれる。

しんどいときに自分のことを気にかけてくれる、元気づけてくれる

心配なことがあるとその人に相談できる

自分のしたことをその人に聞いてもらいたい、認めてほしいと思う

- ・ エンパワメント

うれしい、心がうきうきする

自分を肯定できる、自分に自信が持てる。自分のすることはこれでいいと思える

- ・ 関係調整(一番重要なのではないか?)

支援者と利用者との間に作られた信頼関係をベースにして、利用者を取り巻く様々な人との間の関係を調整する

父母、兄弟、友達、地域の人、関係機関の人、職員等との関係がよくなることによって、本人が自分を認め、他も本人を認める、本人が暮らしていきやすい人の環境を地域に作っていくことを支援する

3) 客体的側面が中心に考えられがちだが、主体的側面に焦点を当てた支援が必要